アーカイブ室新聞　(2008 年 7 月 1 日　第 35 号)

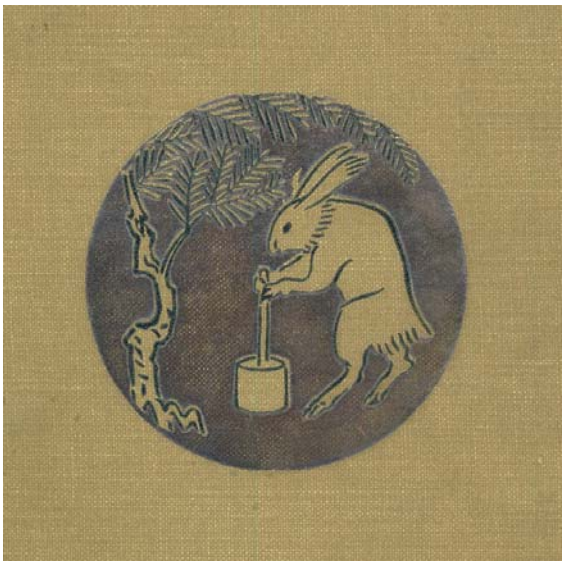
国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室　中桐正夫

＊　一戸直蔵資料届く

5 月 31 日の談天の会でアマチュア天文家の佐久間精一氏が「一戸直蔵に関する資料」の適当なる引き受け手を捜しておられる事を聞き、間髪をいれず天文情報センターのアーカイブ室でお引き受けしたいと申し出た。その資料一式が 6 月 30 日中桐の元に送られてきた。

その量は段ボール箱 1 個に納まったものであった。その目録は、アーカイブ室新聞 31 号に掲載したとおりである。それらは著書・訳書 10 冊、蔵書(洋書)2 冊、佐久間氏の整理されたファイル 4 冊、フロッピーディスク 2 枚(観測変光星記録)などである。今回はその一端を紹介しよう。

著書の 1 冊に「月」という天文啓蒙書がある。下図はその表紙に描かれた絵と扉頁である。



何と興味をそそるではないか。そして口絵の絵が素晴らしい。

このように、一戸直蔵は天文啓蒙書を何冊も書いているのである。

また、一戸直蔵は、明治にあって既に高山山頂への天文台建設計画を公にしている。ある人はいう、「すばる」の原点は一戸直蔵だと。一戸直蔵の新高山観測所の計画の論説の一部を紹介しよう。

一戸直蔵による新高山観測所の計画

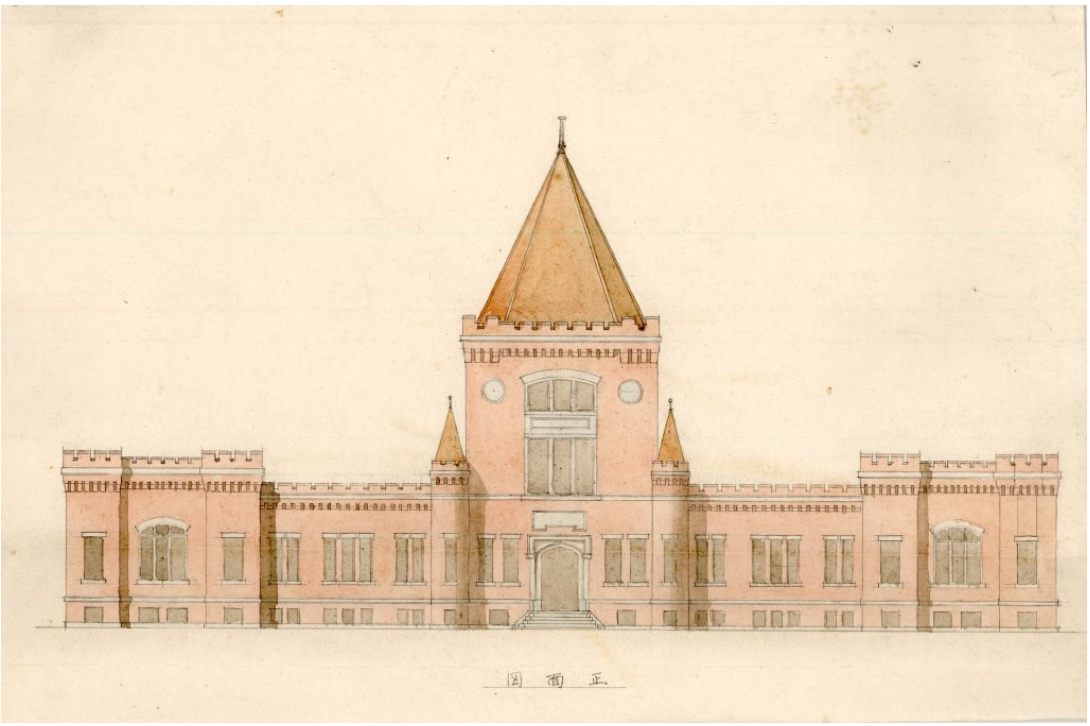
「現代之科学」第 5 巻第 9 号に論説として、「一戸直蔵が新高山観測所計画」なる一文を書いている。その始めには、

余は台湾の適当なる地点を相して、一大天文台を建設し、人生の研究問題として最も雄大なる宇宙の問題をばわが日本人も亦世界の学者と共に究むることを得んか、独り天文学に従事する吾等の満足なるのみならず、我国の学術を進歩せしむる上に大なる手引きとなるべしと思い、心中深く決せしは明治 40 年米国にありし時なり。其計画実行の手順にもと、望遠鏡製作所に入らんとせしに其目的を達する能わず、意を決して帰朝せしは今より算すれば既に 10 年昔となれり。

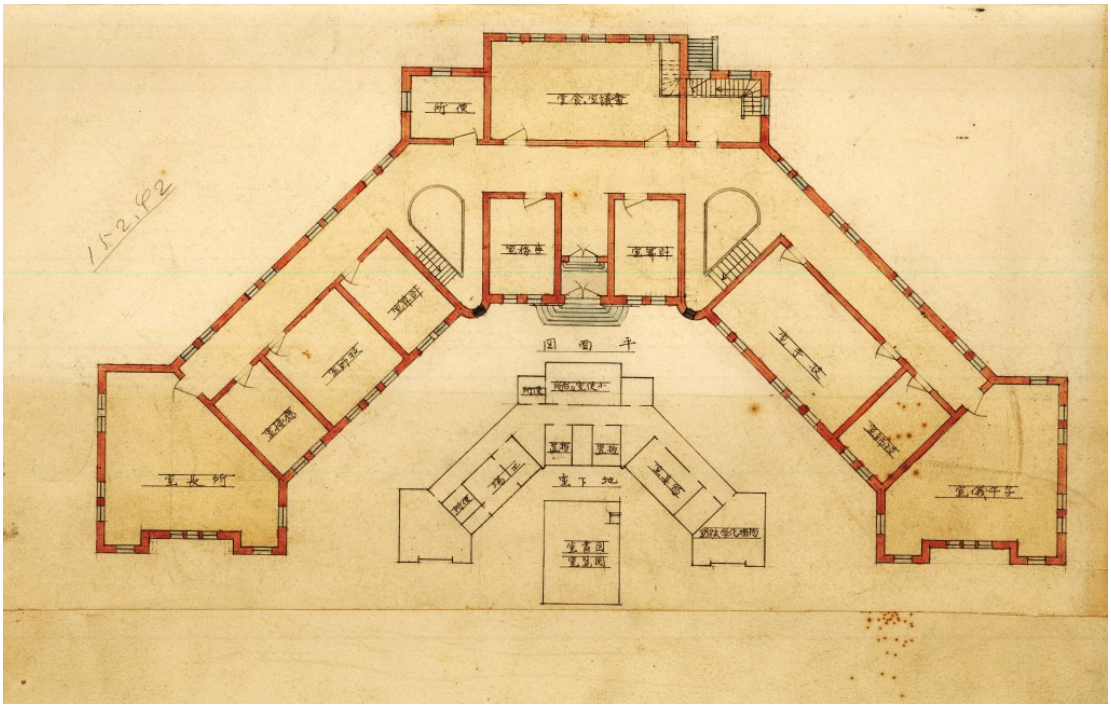
幸にして後藤男爵、岡松法学士其他の賛助を得て、新高山の探検を行う事を得たり。第 1 回には新高北山頂に理学士小倉伸吉君と共に 2 週間の露営をなし諸方面を研究せり。該調査の結果は小倉君と共に「新高山に関する研究報告」として之を公にせり。其後余は尚 1 回新高山及其近傍を視察し、遂に新高山観測所の本部をば阿理山なる塔山に設置するの得策なるを信じ、明治 45 年 6 月之が設立に関する案を作製せり。該案は此の如く今より満 5 年以前の旧作なりと雖も、君の苦心によりてなりしもの、今日の如く時局の影響によりて物価騰貴の場合に於ては素より其儘実地の役に立ち得ざる点あり、平和の日を待つべきものもあるべしと雖も計画其自身に至りては勿論今も尚余の然か信ずる所なりとす。

今之を公にせんと欲する所以のもの下記の理由によれり。我国も其富を増したる結果として、近来公益事業に私財を投ずる人以前よりも多からんとする傾向にあり。勿論彼等多くは眼前の利益を将来すべき事業、又は最も広告的なる事に眼光を向くるが如くに思わるるも、幾多の富豪就中時局の関係上新たに巨万の富をなしたる人々の中には、或は徒に人真似の如き事業をのみ好まず、自己の努力によりて得たる財産をば適当なる事業に寄与し人生の発展に貢献せんとする方もあるべなるべし。余は意を決し新高山天文台の事業に尽くさんとしてより以来、絶えず特志の士なきやを念頭に於けるも、未だ目指す人物を知らず。茲に於てか今之を本誌の読者諸君に余の案を披瀝し、敢て助力を乞わんと欲するなり。若し夫れ諸君にして見込ある人を教え下さらんか、余は直ちに其門を訪ひ説明もすべく、亦低頭以て科学の為めに尽くさるることを乞わんと欲す。

そして彼は何と、此の新高山観測所の本館の図面まで書いていた。下図が本館立面図と平面図である。



新高山天文台本館立面図



新高山天文台本館平面図

今回は、一戸直蔵資料の一端を紹介した。今後、此の資料の扱いについて議論があるが、機を見て興味深いので順次紹介していきたい。